

歴史人口学から見る近世宿場町の女性たち
——奥州松前道郡山宿と東海道の宿場を対象として

高橋美由紀（立正大学）

本報告では、近世後期を中心として宿場町で女性たちが、どのようなライフコースをたどって暮らしていたのかを、人別改帳を主史料として考察する。対象とするのは、奥州松前道の郡山宿（二本松藩）と東海道の宿場である。郡山宿の人別改帳は1709年から1870年の150年以上に亘り、欠年が30年間あるものの、毎年残されている。この史料を用いて、様々な歴史人口学的な研究が進められている。郡山宿は安積郡に位置する、二本松藩の宿場町であった。郡山宿は、周辺農村の人口が停滞・減少していた時においても周辺農村や越後国などから店借・引越・奉公などによって人口を吸引し、天明の飢饉や天保の飢饉などの一時的な減少期を除くと、持続的にその人口を増加させ、18世紀初頭の800人程度から幕末にはその3倍以上の2600人程度に膨れあがった。この背景には、郡山宿の経済的発展がある。それは、様々な規制によって縛られていた二本松城下町と対照的な状況であった。そのような中で、郡山商人達の「村では商売を行うのに差し障るので町として認めて欲しい」という要求により、1824年に郡山宿は村から町へと昇格した。近世日本の都市の人口趨勢を考えると、大都市の大坂や江戸は人口が衰退・停滞したが、郡山宿のような中小都市の中には、人口を増加させたところと停滞・減少させたところが存在し、郡山宿は前者にあてはまる。

そのような経済的に繁栄した町場であっても、近世における女性の労働は本人が決定するというような自由なものではなく、やはり世帯の経済状況や人口学的な状況に左右され、多くは世帯の戸主によって決定された。女性は世帯に包摂されずば、生きていくのが難しく、そのほとんどが結婚をした。そして、小さいときに口減らしとして奉公に出される者も多かった。貧しく女子の多い農村地域の世帯からは、質物奉公人として宿場町にやってくる女性があった。彼女たちは、さまざまな労働に従事したと思われるが、その中でも宿場特有の労働として飯盛奉公が挙げられる。そのような奉公契約によって働きに来ている女性たちは、幼いうちは、見習いとして雑用などをおこなったが、長じてやがて客をとるようになった。そのような労働従事者としてどのような地域から何歳の女性がいくらぐらいの賃金で働きに来ていたのか、年季明けに彼女たちはどこへ行ったのか。またその数は宿場町の人口全体の趨勢や地域経済の変化とどのように関係していたか。

飯盛女性以外の労働者として宿場町に奉公に来ていた女性達は、主に郡山町が含まれる安積郡からの者が多かったが、幕末になるとその数は減少した。それは、労働の形態が「住み込み」という奉公から「通い」へと変化したことにもよるが、彼女たちの暮らす農村において養蚕などの労働需要が増加したことにもよった。

また、町の住人の中には、荷駄を運んだり炊事奉公に携わったりして、賃銀を得て暮らしていた女性もいた。女性の労働は世帯戸主によって決められると先に述べたが、自身が戸主になる場合もあった。町で生まれた女性は、その家族構成や世帯が営んでいた商売によってライフコースが影響を受けることもあった。たとえば、茶屋を営んでいた世帯では、飯盛女性以外にも女性労働の需要は存在し、嫁ぎ先から離縁して戻ってきた女性の中も、労働需要があれば再婚をせずに自己の生まれた世帯でそのような仕事に従事し、暮らすことが出来た。基本的には、赤子がいると仕事は制約されると考えられるが、世帯内で赤子の世話をおこなえる者、例えば、赤子の祖母などがいる場合には、奉公に出ることもあったと考えられる。

東海道の宿場については、残念ながら郡山宿のように長年に亘って継続する人口を明らかにする人別改帳などの史料は現時点では発見されていない。そこで、残存している史料のみから推察するほかはないのだが、江戸時代に日本で最も中心となっていた街道の一つでは、女性はどのように生きていたのか、周辺史料も活用して、郡山宿との類似点および相違点について可能な限り明らかにしたい。

また、主に労働について考察するが、宿場町に生きた女性のライフコースを考えるために、出産・移動・結婚・死亡などの事柄に関しても、併せて考察したい。